## 故郷 (6)

母と宏児(ホンル)が二階からおりてきた。話し声を聞きつけたのだろう。

「ご隠居(いんきょ)さま、お手紙は早くに頂きました。まったく、うれしくてたまりませんでした、旦那(だんな)さまがお帰りになると聞きまして……」と閏土(ルントー)は言った。

「まあ、①何だってそんな、他人行儀(ぎょうぎ)にするんだね。おまえたち、むかしは兄弟の仲じゃないか。むかしのように、②迅(シュン)ちゃん、でいいんだよ」と母は、うれしそうに言った。

「めっそうな、ご隠居さま、なんとも……とんでもないことでございます。あのころは子どもで、なんのわきまえもなく……」そしてまたも水生(シュイション)を前に出してお辞儀(じぎ)させようとしたが、子どもははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これが水生？　五番目だね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理ない。宏児や、あちらでいっしょに遊んでおやり」と母は言った。

言われて宏児は、水生をさそい、水生もうれしそうに、そろって出ていった。母は閏土に席をすすめた。かれはしばらくためらったあと、ようやく腰(こし)をおろした。長ぎせるをテーブルに立てかけて、紙包みをさし出した。

「冬場は、ろくなものがございません。少しばかり、青豆の乾(ほ)したのですが、自分とこのですから、どうか旦那さまに……」

私は、暮らし向きについて訊(たず)ねた。かれは首を振(ふ)るばかりだった。

「とてもとても。今では六番目の子も役に立ちますが、それでも追っつけません……世間は物騒(ぶっそう)だし……どっちを向いても金は取られ放題、きまりも何も……作柄(さくがら)もよくございません。作ったものを売りに行けば、何度も税金を取られて、※元は切れるし、そうかといって売らなければ、腐(くさ)らせるばかりで……」

首を振りどおしである。顔にはたくさんの皺(しわ)がたたまれているが、まるで石像のように、その皺は少しも動かなかった。苦しみを感じはしても、それを言いあらわすすべがないように、しばらく沈黙(ちんもく)し、それからきせるを取りあげて、黙々(もくもく)とたばこをふかした。

母が都合をきくと、家に用が多いから、あすは帰らねばならぬという。それに昼飯もまだというので、自分で台所へ行って、飯をいためて食べるようにすすめた。

かれが出ていったあと、③母と私とはかれの境遇(きょうぐう)を思ってため息をついた。子だくさん、凶作(きょうさく)、重い税金、兵隊、※匪賊(ひぞく)、役人、地主、みんなよってたかってかれをいじめて、デクノボーみたいな人間にしてしまったのだ。母は、持っていかぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。

午後、かれは品物を選び出した。長テーブル二個、椅子(いす)四脚(きゃく)、※香炉(こうろ)と燭台(しょくだい)ひと組、大秤(おおばかり)一本。そのほか藁灰(わらばい)もみんな欲しいといった。

（竹内好訳『魯迅文集Ⅰ』筑摩書房　所収「故郷」による。
一部表記を変えた箇所がある）

※元は切れる…売値が原価を下まわること。　匪賊…集団で略奪を行う盗賊。
香炉と燭台…香をたくための器とろうそくの台。いずれも祭具。

## 確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「何だってそんな、他人行儀にするんだね」とあるが、閏土はなぜこのような態度をとっているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア　身分や立場の違(ちが)いをわきまえるべきだと考えているから。
イ　「私」に長く会わなかったので、距離(きょり)を感じているから。
ウ　子どものころからの親しみを礼儀で示そうとしているから。

〔　　〕

(2) ――線②「迅ちゃん」とあるが、閏土はこの人物のことを何と呼んでいるか。適当なものを選びなさい。

ア　ご隠居さま　　イ　旦那さま　　ウ　水生

〔　　〕

(3) ――線③「母と私とはかれの境遇を思ってため息をついた」とあるが、このときの母と「私」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　昔と違って閏土の口数が少ないことをいぶかしく思っている。
イ　閏土の暮らし向きが苦しいものであることをなげいている。
ウ　世間が物騒でつらいものであることに怒(いか)りをいだいている。

〔　　〕

(4) かつての「私」と閏土の関係を表す言葉を本文中から四字で探し、書きぬきなさい。

□□□□

(5) 本文中には、宏児と水生が、かつての「私」と閏土のようにすぐに仲よくなることが読み取れる一文がある。その文の最初の三字を答えなさい。

□□□